



# 桃五だより



No.629

(11月号)

2023.11.1

杉並区立桃井第五小学校

<https://www.suginami-school.ed.jp/momo5shoubg/>



## 人は学ぶと優しくなる ～カラーユニバーサルデザインを考える～

校長 佐野 篤

杉並教育研究会の子小中合同研修会で、東京慈恵会医科大学副学長の岡部正隆（おかべ まさたか）先生の講演会に参加しました。「色覚の多様性とカラーユニバーサルデザイン」～色覚が異なる人たちへの配慮と工夫～という演題でした。岡部先生は大学で解剖学の教鞭をとるかたわら、色覚のタイプの違いに関わらず情報が正確に伝わるように工夫した色遣い、すなわちカラーユニバーサルデザインの普及活動を行っています。また、ご自身が生まれつき色弱であり、日常生活で体験した不便な経験を活かし、公共の色遣いやプロダクトデザインに対する助言も行っています。

講演会は「色弱は感覚の多様性の一つである」という言葉から始まり、色が見える仕組みを教わり、色弱の人の見え方をアプリ（色のシミュレータ）で体験しました。日本では色弱の男性は20人に1人、女性は500人に1人はいることから、日本には約320万人もの人が、色遣いで困っているとのことでした。割合からいうと40人学級に1人いることとなります。しかし、色弱の人の色覚は劣っているかという、そうではなく、草むらの中でバッタを見つけたり、川の中で泳ぐ魚を見つけたりするのは上手とのことでした。つまり、明るさや形状の違いに、より敏感なのかもしれません。

また、色弱の人は、赤色や緑色が土色っぽく見えたり、赤色と黒色が見分けにくかったりする。色の名前を使うだけのやり取りはわからないとのことでした。だからこそ学校では、できるだけ多くの人に見分けやすい配色を選んだり、形の違いを併用したり、色の名前を記載したりすることが必要とのことでした。

学校では具体的な配慮として、細い赤ボールペンではなく、朱色に近い太いペンを使うとよい。重要な部分は色を変えるだけでなく形を変えるとよい。色を見分けやすいチョークがあることや色の名前だけで指示をしない等を教えていただきました。色弱について学んだからこそ、みんなのしあわせを考えて、みんなに優しい行動をとることができます。まさに、「人は今よりも優しくなるために、しあわせになるために学ぶ」と強く感じました。

学校は異なる感覚を持つ人々が協働する社会の実現を図る初めての場です。だからこそ、学校全体で、これらの情報を共有し、みんなに優しい学校を創っていきたいと思います。

講演の最後に岡部先生は、「求められていなくても対応することが大切だ。血液型と同様に、色覚にも多様なタイプがある。色弱者は少数派、色に配慮のない社会では情報弱者となる。外見では分からない。カミングアウトすることにメリットはないから、配慮が必要な人自身が配慮を求めない。児童・生徒・その保護者も不安を有している。だからこそ、情報を発信する側の積極的な対応が必要である。学校は個性の異なる人と協働できるようになる学びの場である。」とまとめられました。

学校では、子供たちの感覚の多様性を認めて対応することが求められています。男性の20人に1人が色弱であるならば、学校でできる配慮は特別なケアではなく「みんなが困らない環境」を創ることだと改めて思いました。

11月の生活指導目標 すすんで仕事に取り組みよう

桃五スポーツフェスティバルではみんなで力を合わせて取り組み、一つの大きな行事を成功させることができました。11月からは2学期の後半戦です。疲れの出してくる時期になりますが、自分の担当する係や当番にすすんで取り組み、責任をもってやり遂げていきましょう。